

C20a 日本宇宙科学の黎明期の調査-資料収集の状況と展示館構想

阪本 成一, 大川 拓也 (宇宙航空研究開発機構)

1955年4月のペンシルロケット水平試射に端を発する日本の宇宙科学研究は、同年のうちに秋田実験場でのベビーロケットの打ち上げ、さらには1957年7月から1958年末にかけて行われた国際地球観測年を見据えた観測ロケットの開発を通じて飛躍的に進展した。その後もK(カッパ)シリーズやL(ラムダ)シリーズの観測ロケットを用いた実験が本格的に行われた。途中1962年5月のK-8ロケット10号機の事故により秋田実験場は閉鎖され、内之浦宇宙空間観測所に移転したが、ロケット実験は継続された。その多くは超高層大気の観測を目的としていたが、X線・紫外線・赤外線による宇宙観測も精力的に行われた。これは1970年2月のL-4Sロケット5号機による人工衛星「おおすみ」の打ち上げ成功によって節目を迎え、衛星打ち上げ用ロケットであるM(ミュー)シリーズの完成によって、宇宙からの天文観測を自主的に行える環境が整えられた。打ち上げられたロケットや搭載科学機器は、大部分が海上に落下もしくは再突入時に消失するため、実機が残る機会は稀である。しかし、所在確認のための調査によって、試作品や打ち上げられなかったフライトモデルなどが研究室やOB宅などに残っていることが明らかになりつつあり、これらの一部をJAXA相模原キャンパス展示室で公開している。今後は敷地内に展示館を整備し、これらの資料を系統的に閲覧できるようにする予定である。